



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「北大生の学生群像」第Ⅰ期・第Ⅱ期(附属図書館・大学文書館共催企画展示)
Citation	北海道大学大学文書館年報, 5, 133-166
Issue Date	2010-03-19
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/43381">https://hdl.handle.net/2115/43381</a>
Type	other
File Information	5_133-166.pdf



## < 展 示 >

### 「北大生の学生群像」第Ⅰ期・第Ⅱ期(附属図書館・大学文書館共催企画展示)

#### 1. 展示の企画

2009年春、附属図書館北方資料室から大学文書館に対し、学生が図書館に関心を持って来館するような「学生生活」をテーマとする展示を企画したい旨の呼び掛けがあった。大学文書館ではこの提案に賛同し、附属図書館蔵書と大学文書館所蔵資料を中心として、札幌農学校以来の学生の生活を展示構成することとした。

1876年の札幌農学校開校から今日までの北海道大学の歴史を、おおまかに、①札幌農学校前・中期(1876～1900年)、②札幌農学校後期(1900～1907年)、③旧制帝国大学期(1907～1948年)、④新制大学期(1949年以降)と区分して4期構成の展示とし、2009年度開催予定の①②2期分の展示案を8月までに立案した。

展示場所は附属図書館正面玄関ロビーを予定した。学生・教職員はもちろん、学外からの来観者や観光客等の目にも留まり易いが、半面、管理の目が届かず、陽光が射し込むなど、図書資料や文書資料を展示するには向かない場所であったため、レプリカを作成することとなった。

また、図書資料や文書資料などを主とする展示物で「学生生活」を表現するのは非常に難しく、時代が遡るほど、ある程度詳細な展示解説が必要となる。しかし、解説文が長過ぎると展示の精彩を欠くと判断し、展示物と短い解説で表現しきれない点は「学生自身の声」(すなわち、学生時代を振り返った当事者の回想)で補うこととした。この回想文を、回想者の略歴と学生時代の顔写真と共にパネル化して展示することとした。

展示物のレプリカとパネル作成を、8月下旬に附属図書館経費で業者へ発注した。10月下旬にパネル、11月上旬にレプリカが納品された。

10月30日からパネルのみの展示を開始し、11月16日からはレプリカ等の展示も加え、第Ⅰ期展示を完成した。パネル貼り付けボード縦117×横173cmサイズ6枚と縦117×横87cmサイズ4枚、展示ケース縦75×横180×深27cmサイズ4個を使用した。第Ⅰ期は、展示挨拶パネル1枚(A1判サイズ)、展示概要解説パネル1枚(A1判サイズ)、回想文パネル16枚(B3判サイズ)、写真パネル4枚、展示ケース内の展示物26点で展示を構成した。

#### 2. 展示の期間・場所

- (1) 第Ⅰ期展示の開催期間：2009年10月30日～2010年2月15日
- (2) 第Ⅱ期展示の開催期間：2010年2月16日～2010年5月15日

(3) 開催場所：北海道大学附属図書館2階 正面玄関ロビー

### 3. 展示解説

#### 第Ⅰ期 札幌農学校生の学生生活(1) —— 札幌農学校で世界と出会うとき ——

札幌農学校前・中期(1876～1900年、第1～18期生)は、学生たちが農学校で西洋をはじめとする世界と出会い、学生生活の中で学び取り、やがて世界・各界へと旅立っていった。

##### Ⅰ-1. 教室で西洋文化と出会うとき

前期の札幌農学校では、外国人教師は英語を用い、洋書をテキストとし、洋式器具を使用して、最先端の西洋科学に関する講義を行なった。学生たちは必死で英語の講義をノートに書き留めた。また、講義は最先端の科学だけに止まらず、西洋文学・歴史学・地理学・経済学など人文・社会科学にも及んだ。初期の学生にとって、教室は西洋文化との出会いの場であった。

##### Ⅰ-2. 放課後だって西洋流

西洋流は放課後も続いた。寄宿舎の食卓には洋食がのぼり、学生同士が居室での会話を英語に限り、学生が自主的に英語による演説・討論会、聖書の輪読会を開催した。また、外国人教師の発案により、農場での労働の対価として賃金が支払われた。この「学生アルバイト」は、士族出身者がほとんどだった学生たちの労働観を変えていった。

##### Ⅰ-3. 教室から飛び出して

学生たちにとって勉学の間は教室だけではない。1893年以降、教師が引率する修学旅行は農学校の行事として定着し、学生たちは植物採集、地質調査、農場・牧場の経営調査、農産物の作況調査、農業技術調査、土木工学調査、博覧会の見学等を行なって、詳細なレポートを提出した。また、農学校生が札幌の私塾・予備校の講師として英語を教え、教わった生徒が農学校へ進学するという循環も形成されていった。

##### Ⅰ-4. 農学校を飛び立つ

こうして教室内外で西洋をはじめとする世界に出会った学生たちは、やがて農学校から世界へむけて飛び出していく。農学校で学んだ専門的知識を生かして技術者となる者、英語教師になる者、さらに学ぶべく欧米へ赴く者、請われて台湾・中国などへ渡る者など様々であった。各界で活躍した彼らの素地を育んだのは、農学校の学生生活であったと言える。

#### Ⅱ. 札幌農学校生の学生生活(2) —— 札幌農学校で世界が出会うとき ——

札幌農学校後期(1890年代～1910年、第17～23期)、農学校の校風と人材育成の成果が広く知れ渡り、全国各地、そしてアジア諸地域からも学生たちが集った。農学校は世界が出会う場となっていった。

##### Ⅱ-1. 有島武郎がいた青春

第19期生有島武郎は在学時代から異彩を放つ存在であり、既に文学的才能を発揮してい

た。有島は、学生時代も卒業後も同期生や後輩たちに様々な刺激を与え続けた。

## Ⅱ－２．羽ばたく19期生

有島だけではなく、第19期生からは俊英を多く輩出した。有島と共に一時期母校の教官も務めた親友の森本厚吉は、都市消費生活の新スタイルを提唱し、東京文化学園を創立した。応用菌学者半澤洵、園芸学者星野勇三は、北大教授陣の中核を担った。岩波六郎は最新の牧場経営法の紹介に勉めた。

## Ⅱ－３．北のアゼンス、札幌へ

各地・各界で活躍する卒業生たちや刊行物を通じて、札幌農学校の校風や成果が広く知られるようになった。沖縄を含む全国から学生が集まるようになり、さらに中国大陸、朝鮮半島、インドからも留学生が訪れた。古代学術都市アテネになぞらえて、札幌を「北のアゼンス (Athens)」と呼び慣らわすほどであった。

## Ⅱ－４．さらば、演武場の青春

札幌農学校は札幌市街地の中心にあって、札幌の街の形成と共に歩んできた。農学校も学生たちも札幌の街になくてはならないものになっていた。農学校の運動会である遊戯会は街の風物詩として多くの観客を集め、農学校生が教師を務める遠友夜学校では貧困家庭の子どもたちが学び、農学校のシンボル演武場（現札幌市時計台）の鐘の音は、市民の生活にリズムを刻んだ。1903年、農学校は帝国大学への昇格を見越し、市街地からやや離れた広いキャンパスへと移転した。北大の新たな歩みのはじまりである。

## 4．展示挨拶・概要パネル

### 4－１．展示挨拶パネル

附属図書館・大学文書館共催展示企画

#### 北大生の学生群像

1876年に札幌農学校が開校して以来、北大は130年以上の歩みを続けてきました。この間、北大で学士を取得した卒業生は12万人に及びます。さらに戦前の予科・実科・専門部の卒業生、戦後の医療技術短期大学部卒業生、そのほか大学院生・留学生・選科生など、また卒業・修了しなかった学生・生徒も含めば、すばらしく多くの人々が北大で学生時代を送ったこととなります。

北大生は、それぞれの時代に、思い思いの学生生活を過ごしてきました。これら諸先輩の学生生活の影象から、私たちは今の学生生活をより充実させるためのヒントを垣間見ることができないでしょうか。

附属図書館は、北大生が時間を忘れて読みふけた図書・雑誌、授業や試験のために必死になって学んだテキストを所蔵しています。大学文書館は、北大生として在学したことを示す文書、学業や課外活動を記録した資料を所蔵しています。また、直接・間接に学生生活の様子を捉えた写真も多数存在します。これらの資料を基に、北大生の学生生活を振り返る展示企画「北大生の学生群像」を4期に渡って開催します。

#### 4-2. 展示第Ⅰ期の概要パネル

##### 第Ⅰ期 札幌農学校生の学生生活(1)

###### 札幌農学校で世界と出会うとき

第Ⅰ期は、1876～1900年、札幌農学校前・中期、第1～18期生の学生生活を展示する。この時期の札幌農学校では、外国人教師が洋書を参考書として英語で最先端の西洋科学に関する講義を行なった。札幌農学校生にとって、教室はまさに世界との出会いの場であった。

殊に俊英ぞろいの初期農学校生（第1～4期生）であっても、すべて英語でなされる講義についていくのは並大抵ではなかった。さらに講義以外でも、聖書講読、英語演説、洋食導入など、学生生活全体が西洋文化で満たされていた。こうした学生生活が、内村鑑三・新渡戸稲造・志賀重昂といった教養人を生む素地となったと言えるだろう。

学生生活は講義を行なう教室のみではなく、修学旅行、標本採集、各種の勉強会・研究会・サークルへと広がりを見せていった。札幌農学校の幅広い学生生活で世界と出会った卒業生は、やがて世界へと飛び出していくことになった。

#### 4-3. 展示第Ⅱ期の概要パネル

##### 第Ⅱ期 札幌農学校生の学生生活(2)

###### 札幌農学校で世界が出会うとき

第Ⅱ期は、1890年代～1910年頃、札幌農学校後期に在学した第17～24期生の学生生活を中心に展示する。この時期、教授陣の中心は第1、2期生ら卒業生が形成し、農業経済学、植物病理学、農芸化学、農学、畜産学、昆虫学・養蚕学といった専門分科が確立した。

第19期生からは小説家有島武郎はじめ、文化生活を提唱した森本厚吉、納豆製法を改良した応用菌学者半澤洵、「メンデルの法則」を紹介した園芸学者星野勇三などを輩出し、百花繚乱であった。

「北のアゼンス (Athens=アテネ)」として花開きつつある札幌に憧れ、全国から札幌農学校を目指す若者が増えた。さらに中国、インド、朝鮮からの留学生も入学し、札幌農学校は世界が出会う場となっていった。

そして、この時期、札幌農学校は、演武場(時計台)があった開校以来のキャンパスに別れを告げ、北8条の現キャンパスに移転する。新しい環境の中で、北大が次の一歩を踏み出そうとしていた。

## 5. 展示資料目録

### 札幌農学校の学生生活(1) —— 札幌農学校で世界と出会うとき ——

I-1. 教室で西洋文化と出会うとき	
1	W.S. クラーク講義「植物生理学」(佐藤昌介受講ノート、1876年) ノート/大学文書館蔵
	第1期生佐藤昌介がW.S. クラークの講義を書き留めたノート。赤字は、クラークがノート点検をした際に訂正したもの。
2	玻璃漏斗〔はりろうと〕の注文文書(1877年5月25日) 文書/大学文書館蔵(札幌農学校簿書060)
	化学実験器具として注文したガラス製ろう斗の形状説明。農学校初期には、このほかにも西洋式の体操用具・機械類などを多数注文している。
3	J.N. デイナ『地質学』 図書/附属図書館貴重資料室蔵(札幌農学校文庫)
	James D.Dana "Geology," 1870. 当時の農学校蔵書目録には「ダナ氏地質手簿大本」と登録され、地質学の講義の参考書として使用された。現存するのは「第七拾五号ノ一号」だが、「第二号生徒賞賜ペンハローへ払下」と目録に記載があり、教師ペンハローが1冊を成績優秀な生徒に賞品として与えたことが分かる。
4	J.C. カッター『生理学』 図書/附属図書館貴重資料室蔵(佐藤昌介文庫)
	J.C.Cutter "Physiology," 1885. 農学校で生理学・英学等を教えたJ.C. カッターの著書でテキストとしても使用した。カッターが、教え子(第1期生)であり、農学校教授となっていた佐藤昌介に献呈したサインも記されている。
5	W. シェークスピア『ハムレット』 図書/附属図書館貴重資料室蔵(札幌農学校文庫)
	"Shakespeare's Tragedy of HAMLET, Prince of Denmark," 1879. 赤・青鉛筆による下線や書き込みは学生時代の新渡戸稲造(第2期生)によるもの。挿し絵にも色塗りをしている。新渡戸は常に色鉛筆を片手に読書したが、『ハムレット』は殊のほか書き込みが多い。
6	札幌農学校初期の外国人教師(1879年) 写真/大学文書館蔵
	左からJ.C. カッター(生理学)、H. ホイラー(土木学)、ペンハロー夫人、D.P. ペンハロー(化学)、ホイラー夫人、W.P. ブルックス(農学)、ピーボディ(数学)。
I-2. 放課後だって西洋流	
7	志賀重昂「在札幌農学校第弐年期中日記」(1881~82年) 日記/大学文書館蔵
	第4期生志賀重昂の2年生在学時の日記。12月16日には化学の試験を控え、農場実習(「マニュアル、レーボル」)をサボった。そのため、19日に担当教師ブルックスから品行点減点と相応の処分を予告され、「畏ロシヤ」(おそろしや)と記している。

8	寄宿舎の献立 (1881年11月24日) 文書／大学文書館蔵 (札幌農学校簿書104)
	札幌農学校は北海道産物を使用した洋食を奨励した。寄宿舎では夕食を洋食とし、主にエゾシカの肉などが食卓に上がったほか、1日おきにライスカレーが出た。
9	演芸式次第 (1878年7月3日) 文書／大学文書館蔵 (札幌農学校簿書067)
	農学校の教育では演説法・弁論術の習得も重視した。英語による演説会も頻繁に開催した。農業経済学者となる佐藤昌介「農業及其發開」、敬虔なクリスチャンの大島正健「學術ハ宗教ノ侍婢」、日露戦争期に非戦論を説く内村鑑三「魯西亜悪ムヘカラス」、道徳論の著述の多い新渡戸(太田)稲造「農業ノ農家ノ品行上ニ於ケル勢力」など、学生時代、既に顕著な個性が窺われる。
10	「開識社記録」(1877～81年) 記録ノート／大学文書館蔵
	開識社は農学校生が月に2～4回開いた弁論大会。英語演説も多く、対論形式の場合もあった。1878年10月12日には「国ノ役人ノ利口ハ人民ノ頭痛」を論題に、佐藤昌介・出田晴太郎が肯定論、南鷹次郎・柳本通義が否定論を唱えたが、参加者全員が否定論を支持した。
11	第4期生がブルックスに宛てた英文書翰 書翰／附属図書館北方資料室蔵
	農学校生は外国人教師との意志疎通にも当然英語を用いた。書翰では教師ブルックスに農場実習再開を要望している。農学校生は卒業後も恩師へ英文書翰を送り、同窓生同士が英文で遣り取りをしていた。
12	札幌農学校模範家畜房完成予想図(“First Annual Report,” 1877.より) 刊行物／大学文書館蔵
	W.S.クラークが提案し、W.ホイーラーが設計を指導した、アメリカ型の有畜農業施設。後に寮歌「都ぞ弥生」などに歌われる牧歌的な学生生活を醸し出した。1910年には北18条の第二農場に移転改築され、現在もその偉観をとどめている。
<b>I-3. 教室から飛び出して</b>	
13	高橋良直の「修学旅行願」と橋本左五郎教授の「証明書」(1893年8月18日) 文書／大学文書館蔵 (札幌農学校簿書906)
	農学校生は夏休みに修学旅行へ出掛け、植物採集、農場・牧場の経営調査、農産物の作況調査、博覧会見学などを行なった。第13期生の高橋良直らは定山溪で植物採集を行なった。
14	平塚直治の「札幌農学校之証」(1895年5月16日) 証明書／大学文書館蔵
	修学旅行の際に汽車・汽船賃を割り引いてもらうための証明書。第14期生の平塚直治らは、仙台・東京・京都などを約1カ月半にわたり旅行した。
15	高岡熊雄の在学時の日記 (1889年) 日記／大学文書館蔵
	第13期生高岡熊雄が予科4年生のときの日記。7月4日には図書館(「書籍館」)へ行ったが閉館であったこと、晩に豊平川や中島公園を散歩したこと、5日には第8期生の卒業式があり日章旗が掲げられ演武場(現在の札幌市時計台)に緑門が造り込まれた様子など、学生生活を記録している。

16	第12期生の修学旅行報告書（1893年） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書470）
	修学旅行へ行った農学校生は報告書を学校に提出することになっていた。第12期生黒澤信良、山田幸太郎ら7名は南鷹次郎教授の引率で、2月6～15日、野幌・江別・角田・樺戸などで農況視察を行なった。報告はたいへん詳細で、農具の説明にまで及んでいる。
17	川上瀧彌「阿寒湖採藻記」（1898年） 雑誌／附属図書館北方資料室蔵
	農学校生は学業の成果を学友会誌である『学芸会雑誌』などに発表した。第18期生川上瀧彌は『学芸会雑誌』第25号に阿寒湖の藻類の調査を報告し、緑色藻類の一種 <i>Oladophora Sauter</i> に「マリモ（毬藻）」の和名を命名した。
18	中村友太郎・菊地植之進の「時習館教師嘱託願」（1893年4月28日） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書906）
	第14期生中村友太郎、第15期生菊地植之進が、私塾「時習館」で教師をすることについて、農学校に許可を願い出た文書。現在で言えば、学生の学習塾アルバイトに当たる。
I-4. 農学校を飛び立つ	
19	帝国製麻株式会社（1918年ころ） 写真／附属図書館北方資料室蔵
	戦前の北海道の主要産業であった合成繊維業を担った。第14期生平塚直治が技師として勤め、後に取締役になった。その後も多くの北大卒業生が就職した。現在の北8条東1丁目付近。
20	平塚直治「亜麻立枯病研究報告」（1896年） 文書／附属図書館北方資料室蔵
	第14期生平塚直治は、宮部金吾に師事して亜麻の病理学的研究を行なった。専門性をいかして、亜麻から合成繊維を作製する北海道製麻株式会社（後の帝国製麻株式会社）の技師となった。
21	大日本麦酒株式会社札幌支店製麦場（1910年ころ） 写真／附属図書館北方資料室蔵
	元は札幌製糖所の建物。その後、大日本麦酒株式会社の工場となった。札幌製糖所にも大日本麦酒株式会社にも多くの農学校卒業生が就職した。第15期生藤田昌は大日本麦酒株式会社の技師、取締役となった。建物は現在のサッポロビール園に現存する。
22	藤田昌『醸造用大麦論』（1911年） 図書／附属図書館貴重資料室蔵（南鷹次郎文庫）
	第15期生藤田昌は、南鷹次郎に師事して農学を専攻した。大日本麦酒株式会社の技師となり、『醸造用大麦論』を刊行した。裳華房は、松村松年『日本昆虫学』、高岡熊雄『北海道農論』、藤田経信『日本水産動物学』、出田新『日本植物病理学』など農学校卒業生の研究書を多数出版した。
23	宮部金吾宛て藤田昌書翰（1913年6月20日） 書翰／大学文書館蔵
	大日本麦酒株式会社技師長藤田昌（第15期生）が、同技師笠原十司（第18期生）の行なったホップ生育状況調査を宮部金吾教授に伝え、病害についての検査を依頼している。合わせて、北海道庁農事試験場技師高橋良直（第12期生）にも標本を送ったと記している。農学校卒業生のネットワークが北海道の産業を支えていた。

24	宮部金吾宛て川上瀧彌ハガキ (1915年6月27日) 書翰／大学文書館蔵
	第18期生川上瀧彌は台湾総督府技師となり、このときは博物館長を務めていた。恩師宮部に宛てて、台北の高温が体に堪えること、展覧会の準備をしていること、佐藤昌介学長が來台したこと、宮部の来訪を待ち望んでいることなどを書き送っている。川上はこの数カ月後に病逝する。川上の他にも非常に多くの農学校卒業生が台湾総督府で技師などを務めていた。
25	高岡熊雄のドイツ留学時の受講ノート (1903年) ノート／大学文書館蔵
	第13期生高岡熊雄は佐藤昌介・新渡戸稲造に師事して農業経済学を学んだ。新渡戸離任後にその後任となり、ベルリン大学などに留学した。ドイツ語でノートを取り、ドイツ人らしき落書きもしている。
26	谷井恭吉への清国山東省農桑顧問招聘関係文書 (1903年) 文書／大学文書館蔵 (札幌農学校簿書774)
	農場を経営していた第11期生谷井恭吉は清国山東省の農事顧問に招聘された。翌1904年、谷井は多くの山東省出身中国人を留学生として札幌農学校農芸科に入学させた。これを契機として、農学校へ入学する中国人留学生が増えていく。

札幌農学校の学生生活(2) —— 札幌農学校で世界が会うとき ——

Ⅱ－1. 有島武郎がいた青春	
27	有島武郎の「徴兵猶予証明願」(1898年11月17日) 文書／大学文書館蔵
	徴兵令は、20歳以上の男子が徴兵検査を経て、現役(陸軍3年、海軍4年)として入営し、さらに予備役・後備兵役につくことを定めていた。ただし、中等学校以上の在学者には、徴集猶予や卒業後の一年志願兵制度などの特権があった。第19期生有島武郎は20歳(農学校1年級在学)のとき、徴集猶予され、卒業後に志願兵として1年間陸軍に入営した。
28	有島武郎の「欠課届」(1899年5月12日) 文書／大学文書館蔵
	幼い頃から大きな感化を受けてきた祖母・山内静の危篤の報を受け、有島は農学校に欠課届を出し、東京に帰省して看病に当たった。当時、有島は農学校1年級。苦悩の末にキリスト教入信を決意して、両親と対立し、祖母を悲嘆に暮れさせていた時期だった。
29	有島武郎の「身体検査証」(1900年4月) 文書／大学文書館蔵 (札幌農学校簿書723)
	有島が22歳、農学校3年級在学中の身体検査票。身長160cm、体重56kgは、当時の成人男子としては平均的な体格。
30	佐藤昌介の閻魔帳 手帳／大学文書館蔵
	佐藤昌介校長が担当した講義の出欠や成績、試験問題等を記録した手帳。有島ら第19期生が3年級在学時(1899～1900年)の「農業経済学」講義の成績が記されている。最上欄に記載がある有島は35人中10番目の好成绩。

31	スタンレー『リビングストーン発見記』 図書／附属図書館貴重資料室蔵（札幌農学校文庫）
	Henry M. Stanley “How I found Livingstone,” 1872. ヘンリー・モートン・スタンレー（1841-1904）はイギリスのジャーナリスト・探検家。アフリカで行方不明になっていた著名な探検家D.リビングストーンを探し出したことで有名。有島武郎と森本厚吉は、この作品を基に『リビングストーン伝』を執筆した。
32	有島武郎・森本厚吉『リビングストーン伝』（1901年） 図書／附属図書館貴重資料室蔵（札幌農学校文庫・新渡戸稲造文庫）
	デイヴィッド・リビングストーン（1813-1873）はイギリスの探検家、生涯にわたるアフリカ探検で有名。有島は、同級生の森本厚吉と共に農学校の図書館を渉猟してリビングストーンについて調べ、農学校在学の記念として伝記を執筆した。有島にとっては最初の本格的な著作。有島が新渡戸夫人・メアリー宛に献呈文を書き込んでいる。
33	カーライル『サーター・レザータス（衣裳哲学）』 図書／附属図書館貴重資料室蔵（佐藤昌介文庫）
	Thomas Carlyle “Sartor resartus,” 1838. トーマス・カーライル（1795 - 1881）はイギリスの文筆家。内村鑑三・新渡戸稲造・夏目漱石・土井晩翠ら当時の知識人に大きな影響を与えた。札幌農学校でも、第19期生有島・森本厚吉・木村徳蔵を中心に「サーター・レザータス研究会」を開いていた。
34	有島武郎「同級生」の登場人物を特定した筆写資料 手稿／大学文書館蔵
	有島が、農学校卒業10年後（1911年）に同級生や教授の動向を記した著作。有島と同期だった半澤洵が晩年に、あだ名で登場する人物の本名を特定した筆写資料。「学長閣下の禿頭」（佐藤昌介）、「毒舌家」（高岡熊雄）、「バンド・マスター」（森本厚吉）、「ミュル」（有島武郎）、「坊ちゃん」（半澤洵）、「文福」（星野勇三）など。
35	第19期生の集合写真（1900年3月） 写真／大学文書館蔵
	最前列（腕を組んでいる）右端に有島武郎、3人目が半澤洵。前列左端の人物に腕を回しているのが星野勇三。2列目（椅子に座っている）左端から森本厚吉、森廣。4列目右端に岩波六郎。最後列右端に木村徳蔵。第19期生3年級在学時の千歳孵化場修学旅行記念写真。
<b>Ⅱ－2. 羽ばたく19期生</b>	
36	岩波六郎『牧場の経営』（1909年） 図書／大学文書館蔵
	ドイツ留学から帰国したての橋本左五郎教授（第8期生）に最先端の畜産学を学んだ第19期生岩波六郎は、畜産技術者の道を歩んだ。著書『牧場の経営』は、建造物、器具器械、家畜の選定、飼料、畜産加工品など牧場経営全般に言及した専門的ハンドブックとして版を重ねた。
37	月寒種畜牧場 燕麦収穫風景（1908年） 写真／大学文書館蔵
	農商務省管轄の月寒種畜牧場は、北海道庁管轄の真駒内種畜牧場と共に代表的な官営牧場だった。月寒種畜牧場には農学校第19期生岩波六郎が牧場長、第23期生川嶋一郎が技術者として務めた。現在、敷地の一部が羊ヶ丘展望台になっている。

38	森本厚吉『アパートメントハウス 新しい住宅の研究』(1926年) 図書／附属図書館蔵
	農学校第19期生の森本厚吉(1877-1950)は、同期の有島とは在学時代から一方ならない親交を結んでいた。卒業後、アメリカ留学などを経て農学部教授を務めた。北大離職後、東京に移り、「文化生活」を提唱して、文化アパートメントや女子経済専門学校(現在の新渡戸文化学園)を開設した。
39	森本厚吉『文化生活』(1923年6月号) 図書／附属図書館蔵
	森本は1920年代から都市消費生活を論じ、雑誌『文化生活』を発刊して、新しいライフスタイルを提唱した。『文化生活』には有島はじめ、松村松年教授、佐藤昌介総長、新渡戸稲造、田所哲太郎(1910年卒)など農学校関係者の寄稿も多い。
40	半澤洵編集雑誌『納豆』第2号直筆原稿(1921年) 原稿／大学文書館蔵
	有島と同期(第19期生)の半澤洵は、1911年からドイツなどに留学し発酵菌類を研究して、帰国後、北大農学部日本初の応用菌学講座を創設した。特に、納豆菌を研究し、衛生的な納豆製法を提唱し、1921年に雑誌『納豆』を刊行して普及に努めた。雑誌の原稿執筆からレイアウト、校正に至るまで、半澤自身が行なった。
41 ～ 44	半澤博士製法納豆ラベル ラベル／大学文書館蔵
	半澤は、製造法のみならず、納豆の商品化や容器、料理法まで提案し、安全な健康食品としてアピールした。半澤が手を入れた納豆商品ラベルには、納豆を使ったオムレツ、サンドイッチなども紹介している。 納豆ラベル1 「宮城野納豆」(宮城県) 納豆ラベル2 「千歳ナット」(山形県) 納豆ラベル3 「新屋納豆」(秋田県) 納豆ラベル4 「飯沼納豆」(福島県)
45	星野勇三『最新果樹栽培講義』上巻(1915年) 図書／附属図書館蔵
	有島と同期の第19期生は俊英揃いであったが、中でも星野勇三は最優秀であった。星野は園芸学の中でも特に果樹栽培法を専門とし、学術研究を通じて北海道の果樹産業振興に大きく貢献した。
46	森廣・川上瀧彌『はな』(1902年) 図書／附属図書館貴重資料室蔵(札幌農学校文庫)
	農学校第18期生川上瀧彌(「マリモ」の命名者)、第19期生森廣の共著による花の小図鑑。出版には、森と同期の有島や第4期生志賀重昂が尽力した。また、挿画を農学校画学講師飯田雄太郎が担当した。飯田は北海道になじみ深い「すずらん・ライラック」(第3版、1903年)も描いている。
<b>II-3. 北のアゼンス、札幌へ</b>	
47	札幌農学校学芸会編『札幌農学校』(1898年) 刊行物／大学文書館蔵
	札幌農学校学芸会が、農学校の歴史と現況(環境、施設、学生生活など)を紹介するために編纂した冊子。進学ガイドブックとして農学校を全国区へと押し上げた。本書の旧蔵者である第23期生川嶋一郎は「本書ハ私ニ札幌農学校入学ノ決心ヲ為サシメシ紀念ノ冊子テアル」と書き込んでいる。

48	予修科入試関係文書（1902年7月1日） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書978）
	札幌農学校への入学者が全国から訪れるようになったため、各府県の中学校に委託して現地で予修科（本科へ進学するための準備教育課程）の入学試験を実施した。入試は7月9～11日の3日間に及び、試験時間は数学と英語が3時間、作文と漢文が2時間であった。
49 ～ 50	〔沖縄出身学生〕 宮城源榮の「入学願書」・「履歴書」（1900年6月18日） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書729-3）
	沖縄出身の宮城源榮（後に宮城鐵夫と改名）は、沖縄県中学校在学中、同校に博物教師として赴任していた札幌農学校第14期卒業生平塚直治から影響を受け、東京で英語を学んだ後に、1900年に農学校予修科へ入学した。当時、多くの農学校卒業生が全国の中学校等の教員を務めており、こうした卒業生の影響で農学校を目指した生徒も多かった。
51	宮城鐵夫と植物学教室メンバー（1905年7月） 写真／植物園蔵
	後列右が第23期生宮城鐵夫、前列に座っている右が宮部金吾教授（第2期生）、左が半澤洵助教（第19期生）。沖縄出身の宮城は、宮部教授に師事して植物病理学を専攻し、卒業後は沖縄県立農学校長、沖縄県技師、沖縄製糖株式会社取締役などを務め、沖縄の教育界・産業界に大きく貢献した。
52 ～ 54	〔インド人留学生〕 バルタクルの「入学嘆願書」（英文、1905年8月25日） バルタクルの「入学願書」・「履歴書」（和文、1905年8月30日） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書823）
	札幌農学校には1902年以降、清国（中国）から37名、朝鮮から1名、インドから4名留学生が入学した。インド人バルタクル（L.Barthakur）は、1905年に撰科生（現在の科目等履修生）として入学し、農芸化学を学んで1907年に卒業した。
55	〔清国人留学生〕 周忠緯の「臨別贈言」（1902年） 文書／大学文書館蔵
	周忠緯は、1902年4月に清国（中国）から農芸科に入学した札幌農学校最初の留学生。農学校寄宿舎では周の歓迎会を開催した。しかし父親が病気になるため、5月11日に周は帰国することになり、寄宿舎生一同が札幌駅まで見送った。このとき、周は「諸君が親切にしてくれたことは感謝に堪えない。日本に来られて幸せだった。」と告別文を残した。農学校生が留学生を暖かく迎え入れた様子が見える。
Ⅱ－4. さらば、演武場の青春	
56	第19回遊戯会競技出場者（1900年5月6日開催） 刊行物／附属図書館蔵
	札幌農学校遊戯会は、外国人教師の提案で開校2年目の1878年に始まった、日本最初の運動会の1つ。農学校生が出場する芋拾競争・スプーン競争・食菓競争といった各種競争のほか、来賓・他学校生徒・小学生・卒業生が参加する競技もあった。遊戯会には多くの観客が詰めかけ、札幌の風物詩だった。（『第十九回遊戯会報告』、1900.10）

	第18回遊戯会会場図 (1899年5月6日開催)	刊行物／附属図書館蔵
57	遊戯会では様々な余興も行なわれた。この年の仮装行列「出世ノ鑑」は喝采を浴びた。先頭から、乳母に抱かれた嬰兒、男児、小学生、中学生、農学校生、そしてシルクハット・燕尾服姿で人力車に乗った学士紳士と続いた。このほか、農学校生が前掛け姿で茶菓を振る舞う「喫茶亭」も出店した。(『第十八回遊戯会報告』、1899.8)	
	東北地方飢饉救済慈善音楽会広告・プログラム・日誌記事 (1903年2月24日)	文書／大学文書館蔵
58 / 60	前年の1902年、東北地方は大凶作に見舞われた。この飢饉の窮状を救おうと、農学校寄宿舎生が札幌座(南7西3)で慈善音楽会を企画した。当日の「寄宿舎日誌」には「音楽ノ高尚、能ノ優美ナルト演者ハ皆ナ札幌屈指ノ True Gentleman & Lady ナルトニ依リ聴者ハ水ヲ打チタル如ク静寂ナリシ」と記録されている。	
	遠友夜学校第6回卒業記念 (1904年)	写真／大学文書館蔵
61	遠友夜学校は新渡戸稲造・メアリー夫妻が、教育を受けられない子どもたちのために開設した学校。多くの農学校教官や学生・生徒が学校運営に携わった。中央に宮部金吾代表(農学校教授)、左に半澤洵助教授、写真右の木ノ幹を挟んで左側が末光績(第23期生)、右側が信三(1910年卒業)の兄弟。最後列右端に逢坂信吾(1908年卒業)。	
	メアリー夫人が半澤洵に献呈した新渡戸稲造の遺著 (1934年)	図書／大学文書館蔵
62	Inazo Nitobe "Reminiscences of Childhood in the Early Days of Modern Japan," 1934. 故新渡戸稲造を引き継ぎ遠友夜学校の第2代校長に就任したメアリー夫人が、夜学校代表者として実質的な運営責任を担う半澤洵(北大教授)に対して、その尽力に感謝する旨の献辞を添えている。	
	川嶋一郎の「修学旅行鉄道割引証」(1902年7月10日)	証明書／大学文書館蔵
63	第23期生川嶋一郎は、農学校予修科から本科1年生へと進学する年の夏休みに、東北徒歩旅行に出掛けた。その際、川嶋は割引証を使って、札幌から函館まで汽車に乗り、青函連絡線で青森に渡り、再び汽車で弘前へ行った。帰途も故郷の岩手県二戸郡福岡町から、汽車等を利用した。現在の学割に当たる。	
	川嶋一郎の紀行日記「東北遊記」(1902年7月)	日記／大学文書館蔵
64	第23期生川嶋は、同級生と共に弘前・秋田から十和田湖を抜け故郷の岩手県二戸郡福岡町に至る20日間の徒歩旅行を決行した。途中、十和田湖付近では遭難しかけ、山中に野宿している。秋田県土崎付近では馬に乗り道中を楽しんでいる。	
	川嶋一郎の紀行日記「北海紀行」(1904年8～9月)	日記／大学文書館蔵
65	第23期生川嶋は、3年生に進学する夏休みには、名寄から興部に抜け、オホーツク海沿いを徒歩で南下して釧路に至り、汽車で帯広に出て、太平洋岸を苫小牧まで北上する、25日間の徒歩旅行を行なった。9月から畜産学を専攻することになっていた川嶋は、途中、牧場見学をしている。絵は襟裳岬灯台の様子。	

66	下宿屋「自炊庵」の人びと（1900年頃）	写真／大学文書館蔵
	自炊庵は農学校の近隣にあった下宿屋。多くの農学校生が住んでいた。前列左端が星野勇三（第19期生）、後列中央に川上瀧彌（第18期生）、右が芳賀鉄五郎（第18期生）。前列中央は下宿屋の娘、依田戌。	
67	下宿屋「自炊庵」の朝の様子（依田戌の作文、1900年頃）	作文／大学文書館蔵
	北海道庁立高等女学校3年生になった依田戌の作文。下宿している農学校生たちは、「農学校の八時半の鐘の音と共に学校に行く人等ハいって参りますと一礼いたしまして出で参ります」と、下宿屋「自炊庵」の朝の情景を描写している。エルムの鐘の音は、北1条キャンパスの近隣に響きわたっていた。	

## 6. 展示パネル目録

### 6-1. 回想パネル目録

I-1-1	佐藤昌介「エゾシカのステーキ」
I-1-2	宮部金吾「植物採集三昧」
I-1-3	黒岩四方之進「佐藤昌介のお国ことば」
I-1-4	大島正健「内村鑑三 VS 上級生」
I-2-5	内村鑑三「研究成果の実践は祝宴で！」
I-2-6	内田澗「土佐ボーイの悪戯日記」
I-2-7	新渡戸稲造「初めてのアルバイト」
I-2-8	南鷹次郎「ヒゲマ出没注意！」
I-3-9	橋本左五郎「悪友 夏目漱石の袴」
I-3-10	石川貞治「パニーで、菓子屋 蛇足へ」
I-3-11	高岡熊雄「蕎麦屋 まるき㊦」
I-3-12	大島金太郎「ソッチ、モッチ先生」
I-4-13	平塚直治「演武場の大時計」
I-4-14	松村松年「夜更けの西洋梨風味実験」
I-4-15	大村卓一「マラソン選手養成寮」
I-4-16	佐々茂雄「渡る世間にピヤソンさん」
II-1-17	有島武郎「図書館は宝石箱」
II-1-18	半澤洵「有島武郎の隣は特等席」
II-1-19	木村徳藏「麒麟児 有島武郎」
II-1-20	末光績「カーライル研究会」
II-2-21	星野勇三「演武場イルミネーション」
II-2-22	伊藤清藏「遊戯会 1マイル競走」
II-2-23	明峰正夫「寄宿舍、夜の生態」
II-2-24	橋本直也「窓辺に熊の皮」
II-3-25	末光信三「放牧牛がのそのそ」
II-3-26	素木得一「昆虫を追って、どこまでも」

Ⅱ-3-27	岩波六郎「遠友夜学校の学び舎」
Ⅱ-3-28	川嶋一郎「トルストイ中毒」
Ⅱ-4-29	田所哲太郎「洋書輪読講義」
Ⅱ-4-30	中島九郎「ザリガニと豪傑先生がいたころ」
Ⅱ-4-31	逢坂信彦「校長の頭は…」
Ⅱ-4-32	鈴木限三「白亜の新校舎」

## 6-2. 風景パネル目録

P 1	旧札幌農学校平面図 (1880年)	平面図／大学文書館蔵
	北1～2条西1～2丁目にあった札幌農学校キャンパス。図面の上が西方向。ここが農学校生の学生生活の舞台となった。	
P 2	札幌市街地 (1889年)	写真／附属図書館北方資料室蔵
	北海道庁屋上から東側を撮影したパノラマ写真。中央に札幌農学校演武場、その左が北講堂、右が寄宿舎。	
P 3	札幌農学校の農校園 (1880年頃)	写真／大学文書館蔵
	札幌農学校の農場施設 (現在は北18条に移転)。左奥に見えるのが模範家畜房。現在の事務局建物の北西あたり。	
P 4	北西から見た札幌農学校校舎 (1890年頃)	写真／附属図書館北方資料室蔵
	左から、観象台 (天文台)、北講堂、演武場、寄宿舎。	
P 5	〈演武場外部〉 演武場前の第20回遊戯会 (1901年)	写真／附属図書館北方資料室蔵
	農学校創立25周年を記念して演武場 (現札幌市時計台) 前で開催した遊戯会。多くの市民が見物にかけつけた。	
P 6	〈演武場内部〉 佐藤昌介・宮部金吾・南鷹次郎の学位授与祝賀会 (1899年)	写真／附属図書館北方資料室蔵
	札幌農学校第1、2期卒業生だった三者は、長く教授陣の中心を担った。多目的ホールだった演武場2階の造りがよくわかる。	
P 7	〈図書館〉 新築直後の札幌農学校図書館 (1903年12月)	写真／附属図書館北方資料室蔵
	1965年に現在の附属図書館本館が竣工するまで、60年以上にわたり北大の研究・教育を支え続けた。建物は現存する。	
P 8	〈新キャンパス〉 校舎配置図 (1913年)	刊行物／大学文書館蔵
	1903～07年にかけて、当初の北1～2条西1～2丁目のキャンパスから、北8条の現キャンパスに移転した。9 (林学講堂)、13 (昆虫学及養蚕学講堂)、14 (図書館) の建物は現存し、登録文化財となっている。	

## 7. 回想パネル



### エゾシカのステーキ

サトウ ショウスケ

佐藤 昌介 (1856-1939年)

岩手県花巻市出身 第Ⅰ期生 (1876-1880年在学)

農業経済学専攻、教授、農学博士

1894 - 1930年、札幌農学校長・東北帝国大学農科大学長・北海道帝国大学総長を務めた。

北海道への渡航は品川より玄武丸（凡一千噸）に搭乘する事となつた…東京より来れる我れ等学生は、恰も札幌に洋行せるかの感があつた。即ち衣食住は凡て洋式で、授業も外国教師であつた、邦語の教授は更に無かつたのである。寄宿舎内では凡ての必要品を支給せられ、洋食は朝夕二度、牛肉はなかりしも鹿肉は甚だ多く、其のステーキは飽くまで貪つて居た。初めての冬を明治九年に暮したるが、クラーク先生の活潑なる野外の採集等に同伴し、殊に雪中手稻登山の如き、当時の開拓使の役人を驚かしたのである。  
（『文武会会報』第65号）



### 植物採集三昧

ミヤベ キンゴ

宮部 金吾 (1860-1951年)

東京都台東区下谷生まれ 第Ⅱ期生 (1877-1881年在学)

植物病理学専攻、教授、理学博士

北海道・サハリン・クリル諸島などの北方植物を研究し、世界各国の著名な植物学者と親交を持った。1946年文化勲章受章。

豊平河原、現今の植物園、農園の附近等植物採集には実に好適地であつた、(札幌)区外に少しく出ると珍しい植物を得ることが出来た、その頃の学生は一般に植物を盛に採集し学校の方でも殆んど一の課業として各自に植物二百種位の採集を命じた、殊に僕は前より此の方には非常な趣味を有せる故四年間暇さへあると採集に出かけた、この様なわけで友人も珍しい草があると僕にくれ卒業の時は札幌附近の植物五六百種も集めた、之に名称を附し(明治)十四年に東京に開設せる第二回内国勸業博覧会に出品する事を学校から命ぜられた、この標本にそへて北海道植物目録を出品して為に褒状をうけた、これは在学中の事である。  
（『文武会会報』第55号）



## 佐藤昌介のお国なまり

クロイワ ヨモノシン  
黒岩 四方之進 (1856-1929年)

高知県安芸市出身 第1期生 (1876-1880年在学)

畜産技師、牧場経営者

新冠牧馬場 (後に宮内省新冠御料牧場) の初代牧場長を務めた。その後、十勝に黒岩牧場を経営した。

(佐藤昌介) 博士は在校当時より学者風にて余輩の如く野外に跳回るはよりも寧ろ室内に静に読書するを好まれ…級中の年長者にて頗る老成の風あり…始終開識社の社長に推され其発展に大に貢献せらる又討論題の如きはいつも適切なるものを提出し討論の趣味を喚起せしめたり、唯博士の「ザジズゼゾ」音の不明瞭なるより時に他のワンパク者より苦しめられたることあり、小生もその苦しめたる一人に洩れず今日に至るも之れを思へば気の毒の感に堪へず…博士は在校当時より囲碁を好まれ其頃幹事たりし森源三氏杯と闘戦し「スマツタ…」の声を聞くこと珍敷からざりし。

(『文武会会報』第65号)



## 内村鑑三 VS 上級生

オオシマ マサタケ  
大島 正健 (1859-1938年)

神奈川県海老名市出身 第1期生 (1876-1880年在学)

札幌農学校予科教授

札幌独立基督教会設立の中心メンバー。農学校離任後は各地の中学校長を務めた。

(内村鑑三が着札すると) 校舎の一隅からエホバをたたえる讚美歌の声が鳴り響いて来た…受洗によつて元気づいた上級生共が、ミッションナリー・モンク (耶蘇坊主) という仇名をつけてあるほど信仰的に執拗な私…を先頭に立てて、フレッシュマン一同を教化しようと猛烈に突撃して来た…怒髪冠をついた鑑三は、血迷つた上級生を日本固有の宗教に引き戻して尊い日本精神によみがえらせてやろうと意気軒昂たるものがあった。が日がたつにつれて心を許した友である太田 (稲造) も宮部 (金吾) も続々と敵陣に走つて己れ独り異教徒の名を冠せらるる情勢になつて来た…突撃は熱烈をきわめ…遂に…基督教の信条に彼鑑三は共鳴する…学友達は頑物内村の心境に変化が生じたことを知つて大に喜び、力強い彼を擁して教団の強化に邁進した。

(『クラーク先生とその弟子たち』)



## 研究成果の実践は祝宴で！

ウチムラ カンゾウ

内村 鑑三 (1861-1930年)

東京都文京区小石川出身 第2期生(1877-1881年在学)

キリスト教思想家

札幌独立基督教会の設立メンバー。日露戦争時に非戦論を唱え、聖書研究をライフワークとした。

回心せる新入生一同相集り…祝宴を催した…エドウィン(足立元太郎)は彼の発見し得る最大の南瓜を獲得する為に畑に遣られた、多量の大根、キャベツ、トマトも共に獲得し来る可し。我等の植物学者フランシス(宮部金吾)は蒲公英の葉が何処にあるかを知つてゐた、余は彼の胴乱を携へて其に一杯此の美味なる植物を採集するために遣られた。熟練せる化学者にして且つ常に料理学の理論と實際の第一人者であつたフレデリック(高木玉太郎)は、彼のアルカリと塩と砂糖とを以て用意を整へてゐた。ヒュー(藤田九三郎)は彼等の目的の為に最高熱度の火を燃焼せしむる事によつて、彼の数学と物理学の蘊蓄を提供した。文学的のパウロ(新渡戸稲造)は、何時でも斯ういふ時には怠け者であつた。(『余は如何にして基督信徒となりし乎』)



## 土佐ボーイの悪戯日記

ウチダ キヨシ

内田 瀧 (1858-1933年)

高知県高知市出身 第1期生(1876-1880年在学)

北海道庁技師、農場経営者

卒業後、北海道の殖民地撰定区画に携わり、農場経営にも当たった。

1879年9月9日 マイクロスコープ作業の後、四時に田内(捨六)と中島(信之)と小生ファームに行きてメロンを食う。ブルックス教授宮崎其他の人に見つけらる。  
1879年9月11日 校圃を廻りてメロンを食いたれども熟れずしてうまくなし。故に又グリーンハウスへ行き、西瓜五つを食いて帰る。  
1879年9月26日 ピーボディー(教授)十五分遅くなりしを以て一回逃げる。  
1879年10月14日 (同級生の柳本通義、黒岩四方之進と共に犬を捕まえ)葱及び醤油を加へてその肉を煮、ジョンK伊藤(一隆)をだまして食せしむ。

(『クラーク先生とその弟子たち』)



## 初めてのアルバイト

ニトベ イナゾウ  
新渡戸 稲造 (1862-1933年)

岩手県盛岡市出身 第2期生 (1877-1881年在学)

農政学専攻、教授、農学博士

農学校離任後、台湾総督府高官、京都・東京両帝大教授、国連事務次長などを務めた。

学生の大富源は所謂手業料にてぞありし。これぞ今日の農業実習にして、担任者は農学教師ブルツクス氏…氏は米国風の思想をいただき労働は相当の報酬を与ふべしと主張し、学生毎週両度つゝ出て手業の課を受くれば農園の爲めには幾分かの労働をなすこと故、壱時間五銭つゝの割合を以て月末に勘定をする事に定めたり。我等安政前後の出生なれば士族風の気象も少しは保存せるを以て、金銭を払はるゝ杯甚だ賤敷様に思ひたれば、胸中は欲くてたまらねど口には受領可否に関し討論せる…然るに一度壱円以上の金を掌に握り「これぞ吾か額にかきたる汗の賃銀なり」「これだけあれば五度や拾度蛇足に通ふも苦しからじ」と心に悟開らきたる後は、誰壱人として手業料の貴賤を論する者なく…課業外にも手業を願ひ出る輩さへ顕はれたり。

(『蕙林』第12号)



## ヒグマ出没注意！

ミナミ タカジロウ  
南 鷹次郎 (1859-1936年)

長崎県大村市出身 第2期生 (1877-1881年在学)

農学専攻、教授、農学博士

長く農場長を務め、農学全般の講義を担当した。1930-33年、北大第2代総長を務めた。

札幌なども自分等が来た当初は戸数が千戸位。市街と云つた所で大通から南六条の間。西は五六丁目東は二三丁目まで、其内にも家のまばらな所があつて、北三条の旧校舎即ち其当時の農学校のあたりは広々たる野原で官舎が所々に散在して居た位な事である、農場の事務所から町へ出るにも吹雪の夜などは随分見当を失つて度法もない方に出たりすることがあつた。曾ては学校の前に鹿が飛び出したこともある。第二農場にあるバーンは…明治二十年頃には其裏あたりにまだ熊が出て放牧の豚を食ふことが三四年も続いた位だ…今日のような市街に発達して来たのかと思ふと…自分は…亀に乗せられた浦島を見たような気がする。

(『文武会会報』第55号)



## 悪友 夏目漱石の袴

ハシモト サゴロウ  
橋本 左五郎 (1856-1929年)

岡山県岡山市出身 第8期生 (1885-1889年在学)

畜産学専攻、教授、農学博士

練乳製造法の研究で大きな業績を残し、朝鮮総督府模範農場長も兼任した。北海学園の運営にも携わった。

私が（東京大学）予備門で落第して、農学校へ来たのは、まあ主に徴兵の関係です。さあ予備門は落ちた、どこかへ入らなければといふわけだったのです。郷里が海岸であったし、実は海軍兵学校へ入らうと思ったのでした。…ところが先きに試験を受けた（札幌）農学校へ幸ひ合格したので、その低こちらへ来てしまったのです。これは明治十八年の八月です。札幌へくる時には、私の袴があまりボロボロだったので、夏目（漱石）がこれを穿いてゆけと云って袴を呉れましたが、これも裾の方は切れてゐました。丁度剣舞をやる男が穿く様な、粗い白い縞の袴で、これを穿いて、行李を網に入れて背負って、刀を一本さして、こちらへやって来ました。

（『漱石全集月報』第11号）



## パニーで、菓子屋 蛇足へ

イシカワ テイジ  
石川 貞治 (1864-1932年)

鳥根県浜田市出身 第7期生 (1884-1888年在学)

鉾山技術者・実業家

技師・事業者として金山・炭坑・油田等の開発・経営に関わり、地質学や考古学に関する調査も行なった。

僕の次に入った連中等は…白い袴をはいて中には日本刀を負って（たしか橋本（左五郎）さんだ…）来ると云ふ有様で乱暴者も居れば議論好も居て、宿直の所へ迫ては議論を吹きかける者もあれば、土堀を越して饅頭を買うに行くのもある、之をコンパニーと云つて遂にはパニーへと云ひました、西川（忠太郎）君藤根（吉春）君等の豪傑連が最も此の主唱者で、廊下でパニー！と云つて大声でどなると二階からも下からも直ぐパニー！へと云つて直ぐ「オイ貴様行け」と云ふ事になる、と直ぐ窓からでも何処からでも飛び出して狸小路の蛇足と云ふ菓子屋に行つたものです、名は蛇足だが実は吾々に取つては蛇足どころか本足でした。

（『文武会会報』第70号）



## 蕎麦屋 まるき㊦

タカオカ クマオ  
高岡 熊雄 (1871-1961年)

島根県鹿足郡津和野町出身 第13期生 (1887-1895年在学)  
農政学・植民学専攻、教授、農学博士  
北大学派植民学を確立した。1933-37年、第3代北大総長を務め、北海道政・札幌市政にも深く関わった。

学校の経費が削減せられたため、学生全部を校費生にすることが出来なくなり、毎年学年試験の成績のいい少数のものだけが校費生になる資格を得ることとなった。これは在學生にとっては一大打撃であった。…その当時の校費生は洋服、靴、帽子を実物で支給されたほか、月七円もらい、そのうちから食費を五円払い、残り二円が小遣であった。私はそのほか兄から月二円五十銭もらっていたから、合計九円五十銭、これが一カ月の学資であった。こんなわけで私には、金のかかる娯楽なんてことは少しも考えられなかった。唯一の散財は、いまでもあると思うが、㊦という狸小路のそば屋へ行くくらいのものであった。  
(『時計台の鐘 高岡熊雄回想録』)



## ソッチ、モッチ先生

オオシマ キンタロウ  
大島 金太郎 (1871-1934年)

長野県茅野市出身 第11期生 (1886-93在学)  
農芸化学専攻、教授、農学博士  
台湾総督府高等農林学校長などを兼務した後、北大を離れ、台北帝国大学理農学部長を務めた。

当時米国人でブリガムといふ先生が本科の農学の講座を担当して居った…時には英語で以て討論会をやったり又論文などもよく書かせられたので云はゞ四年間 Agricultural English を教へられたやうなものでした。…吉井(豊造)先生も始めは英語で講義をせられたのですが、それに就て思ひ出すのは学生が色々の尊称を先生方に奉つたことです。今でもそうだらうがその頃は又盛んにやつたもので、或先生の如きはソッチ、モッチ先生といふ尊称を持つて居られた。それは英語の such や much をソッチやモッチと発音されたからでした。吉井先生の御得意の言葉にプンジェント (Pungent) といふのがあったので学生はプンジェント先生といふ尊称を奉つて居つたものです。  
(『文武会会報』第70号)



## 演武場の大時計

ヒラツカ ナオハル  
平塚 直治 (1873-1946年)

札幌市白石区出身 第14期生 (1888-1896年在学)

植物病理学専攻、農学博士

宮部金吾の下で垂麻立枯病を研究し、北海道製麻（後に帝国製麻）株式会社の技師・支店長・取締役等を務めた。

私は丁度（明治）二十五年の七月から、二十九年の七月まで、四ケ年間、此の建物（演武場）で御厄介になりました。植物を宮部（金吾）先生に、農学を南（鷹次郎）・佐藤（昌介）両先生に、昆虫を橋本（左五郎）先生にお習ひしました。階上のこの会議室が植物の実験室に充てられてゐて、宮部先生は菌類の培養をされてゐた。私は在校二年目から、此の実験室の仕事をするこゝとなつたが、毎定時に大時計が鳴ると、建物が振動するのでその度毎によく懸滴培養器の懸滴が落ちて、実験がだめになるので、これには実際泣かされました。  
（『時計台建物修築記念誌』）



## 夜更けの西洋梨風味実験

マツムラ ショウネン  
松村 松年 (1872-1960年)

兵庫県明石市出身 第13期生 (1887-1895年在学)

昆虫学専攻、教授、理学博士・農学博士

『日本昆虫学』を著し、日本産昆虫の学名と和名を定めた。欧文雑誌『インセクタ・マツムラーナ』を発刊した。

（開識社で）講師は「西洋梨の栽培を奨む」と…その香味の絶美なることに論及し、われわれをして涎を流させんばかりにしたあげくのはて、すこぶる挑情的にこういった。「諸君、道庁裏の勸業試験場に、目下成熟している美果を味えば、わたくしの言葉が少しも誇張でないことが解るであろう」と。当時の日本で、西洋梨はまだ知られない珍果であった…この機を逸して終生この西洋梨の味を知らずとあつては、われわれが農学士となった暁に、その肩書を汚す恐れなきにしもあらずという勝手な理由をこしらえ…三更の月明りをたよりに出陣し…各自背負い得るだけを欲張って帰った。…西洋梨の風味の実験が始まるゾ…すでに寝ておつた者までとび起きて、遺憾なく、それこそ充分に、実験した。  
（『松村松年伝』）



## マラソン選手養成寮

オオムラ タクイチ  
大村 卓一 (1872-1946年)

福井県福井市出身 工学科第6期生(1889-1896年在学)  
鉄道技術者・官僚  
逓信省・朝鮮総督府・関東軍などで鉄道技師・官僚を  
務め、後に南満州鉄道株式会社(満鉄)総裁に就任した。

(中央寺附設の自炊寮「螢雪庵」では)交代で自炊をやって小松さん(小松万宗禪師)の般若心経や観音経などの提唱をきき、時には座禅をくんだりして大いに精神修養の真似事をやったりした…そのころの学校は甚だスポーツ熱が盛んで、春秋二回マラソン競走をやってみたが螢雪庵組はそれでは何時も成績がよい。何故かといふと、毎朝当番は鍋一杯に飯を炊いたが、若い者ばかりが粗食をやってゐるので、何時でも飯の量が足りなくなる。後れると充分喰べられないこともある。そこで学校から早く帰って満腹するだけ食ってやらうといふので、帰途は十五六町の道を全能力を出して走って帰るのである。これが知らず知らずのうちにマラソン選手にさせたわけ…

(『大村卓一』)



## 渡る世間にピヤソンさん

ササ シゲオ  
佐々 茂雄 (1874-1949年)

北海道伊達市出身 第16期生(1891-1898年在学)  
水産製造学専攻、教授  
水産学科・附属水産専門部を経て、函館水産専門学校  
(いずれも水産学部の前身)の校長を務めた。

私は学費の工面をしなければなりませんので南二条西七丁目の高橋塾へ臨時講師に出かけました。担任する組も定まっておらず午後五時半頃から十時半頃まで毎日行つて月二円五十銭もらいましたが、こゝでも時間をとりすぎるので困りました。しかし他によい方法もなく仕方なしに勤めました。こんなことを二年半ほど続けていました時、教会のピヤソンさん(米国人)が非常に同情してくれまして、自分に日本語を教えてくれ、ばその代り英語、独語を教えようということになり、週三-三四回二時間づつ日本語を教えて月金五円をいただきます。これで時間的にも経済的にも非常に助かりました。これを本科卒業まで続けました。(「故佐々茂雄先生自叙伝」)



## 図書館は宝石箱

アリシマ タケオ  
**有島 武郎** (1878-1923年)

東京都文京区小石川出身 第19期生(1896-1901年在学)  
農業経済学専攻、予科教授、小説家  
在学時から文学に関心が強く、離任後は文筆家として  
立った。遺作「星座」は学生生活を題材としている。

偶然の機会から、レイキーのリビングストーン伝を手に入れて、(森本厚吉君と)二人でそれを読み耽った…私達はこの偉人の生涯の委曲を深く究めようとして図書館の隅々を漁った。所がそこからリビングストーンやスタンレーに関する数々の大部な書物が現われ出た。札幌農学校の創立当時…学校で教鞭を執っていた外国の備教師達が、盛んにそうした書物を取寄せて読んだものと見える。その後、誰からも顧られずにそれらの書物は塵に埋れて書架に列んでいた。私達は宝石を土中から掘り起すようにして、それらの書物を日光の射す所に持ち出して読んだ。而して一つの大望を企てるようになった。それはそれらの書物によって、リビングストンの伝記を日本語で書いて見よう。而してそれを私達の札幌留学の記念にして、残して行こうということだった。  
(『リビングストーン伝』)



## 有島武郎の隣は特等席

ハンザワ ジュン  
**半澤 洵** (1879-1969年)

札幌市白石区出身 第19期生(1892-1901年在学)  
植物病理学・応用菌学専攻、教授、農学博士  
若くして『雑草学』を著し体系化した。後に納豆製法の  
確立・普及に努め「納豆博士」と呼ばれた。

有島サンハ札幌農学校の予科五年級に明治二十九年ニ東京の学習院から来られ新渡戸稲造先生の宅から通学されて居た。国文学と歴史に造詣が深く農業経済学科を専攻され卒業論文ニは鎌倉時代の農政ダカ経済の方面の事を書かれた。当時教室内の学生の席次はアルファベット順であったため私は常に有島サンの隣りに席を有して居た御蔭で佐藤昌介先生の農業経済学、農政学、殖民学などの講義のノートには幸いに穴があかず大に助かった。学生時代の有島サンは静かな、おとなしい貴族風の人でした、常にクラスの正義派といふかクリスチャン派ニ属して居た。特別ニ目立たぬようでしたが詩藻裕かな方で文学に書に画ニ趣味を有し学生時代ニ森本厚吉君とリビングストーン  
の伝記を書、れてこれを出版され学生一同敬服して居た。

(大学文書館蔵半澤洵手稿)



## 麒麟児 有島武郎

キムラ トクゾウ  
木村 徳藏 (1875-1928年)

宮城県石巻市出身 第19期生 (1894-1901年在学)

農業経済学専攻、生物学者

東北学院、台湾総督府中学校、神戸女学院を経て、東京商科大学 (現在の一橋大学) 予科教授を務めた。

札幌の予科時代から本科、殊に卒業の一二年前であつたか、君 (有島武郎) と森本 (厚吉) 君及び河野 (孝太) 君等と僕も、彼の新渡戸恩師の空屋に雑居して相撲や柔術の真似をやつたり、秋から冬にかけて毎晩の様に勉強の時間よりは遙に長時間、共にストーヴを囲み、庭園内から収穫した山なす苹果を食べながら騒いだこともあつた。…君の祖母君は…『武郎は私が丹誠して育てた子です』と…吾等の恩師新渡戸先生は『有島は深山の大木のやうな青年だ』と云はれたことがあつた。家庭での麒麟児と云ひ深山に育つた大木と云はれた君が、更に欧米に、札幌に、而して東京で樹齡か児齡を加へたのだから、君の人物に非凡性の色彩が濃厚であつたことは当然のことであつた。  
(『泉』終刊有島武郎記念号)



## カーライル研究会

スエミツ イサオ  
末光 績 (1881-1954年)

愛媛県西予市出身 第23期生 (1900-1906年在学)

植物学専攻、教育者

宇和農学校・松山農業学校の校長を務めた。東大文学部英文科に入学・卒業の後、明治大学で教鞭をとった。

僕が初めて君 (有島武郎) を知つたのは明治三十三年で、君が基督教的信仰の最高潮にある際であつた。当時君は札幌農学校の最上級、僕は予修科の一年で、君や、森本 (厚吉)、木村 (徳藏) の三先輩を中心とし、外約十名の後進者から成る、カーライル研究を軸として互の感想を述べ合ふ事を内容とした、無名の小会合が其機を与へたのである。共に在ること一年に満たずして、僕は全く君の信仰に同化せられ人格の香に酔うてしまった…僕は年長の友として最高の愛敬を君に捧げ、君も亦最も熱きものを僕に酬いた。…明治三十六年君が渡米の暇乞として札幌を訪れた時…僕は見るより走せ寄つて手を握り君の體にしがみついてしまつたが、涙ばかり出て言葉が出ない。けれども相伝はる熱は総てを最も雄弁に語つた。  
(『泉』終刊有島武郎記念号)



## 演武場イルミネーション

ホシノ ユウゾウ  
星野 勇三 (1875-1964年)

山形県鶴岡市出身 第19期生 (1894-1901年在学)

園芸学専攻、教授、農学博士

果樹栽培法を研究した。日本に「メンデルの法則」を紹介し、大通公園の花壇設計を行なった。

明治三十四年の創立二十五周年記念式を演武場で開いた折は、この校舎は可成腐朽してゐたので、多数の来賓を迎へて墜落でもしたら大変だといふので、階下の教室から丸太で一時つつかへ棒をしたものである。…正面玄関に何か変つた装飾をしたいと一生けんめい考へた末に、出来上つたものがイルミネーションでした。原十太さんが考案したのです。今の拓殖銀行の所に火力発電の電燈会社があつたので、そこから電力を貰つてやり、皆さんから非常に注目されました。…(夜に市中を練り歩いた)提灯行列に、僕等同級一同が揃いの赤の燕尾服を着け、同じく揃いのチリンダーを冠り、先登した…記念祝典に誠にふさわしきものであつた。

(『時計台建物修築記念誌』、『恵迪察史』)



## 遊戯会 1マイル競走

イトウ セイゾウ  
伊藤 清藏 (1876-1941年)

山形県西村山郡河北町出身 第18期生 (1891-1900年在学)

農業経済学専攻、助教授

札幌農学校離任後、盛岡高等農林学校を経て、アルゼンチンに移住し農場を経営した。

当時札幌農学校の遊戯会は、札幌年中行事中最も華やかな一つ…ことに学生の最も血をわかせた競技は百メートル競走、半哩競走及び一哩競走であり、兵装競走なども多くの興味を以つて見られた…(私も)一ヶ月半の熱心な練習の後、遊戯会の当日には十数競技の何一つにも参加せず満を持して最後の一哩競走を待つたのである。“ズドン”といふ一発を合図に夢中になつて走つた私は、ダンダンと十数名の参加者を抜いて最後の一人に追いつかんとあせつた時、横合ひより親友の平沢真が来て共に走つて呉れた時は本当に嬉しかつた、それにも増して私の喜んだことはいよいよ決勝点に近づいた時である、新渡戸先生が走つて来て私に「二等！」と叫ばれたことであつた。

(『南米に農政三十年』)



## 寄宿舍、夜の生態

アケミネ マサオ  
**明峰 正夫** (1876-1948年)

北海道出身 第17期生 (1891-1899年在学)

育種学専攻、教授、農学博士

稲の開花現象や種子発芽の研究を進め、稲の遺伝的交配方法の実現に道筋を開いた。

起床の鐘は七時で、門限は九時、消灯は十時であつたと記憶するが、此内門限だけは励行され九時には巡視が門と玄関とを閉鎖する、同時に舎監が各室を点検する。遅れて帰舎するものは小使室より入ることを許されたが其旨翌日申告される。門限後は何れも自室に閉ち籠つて勉強に余念なきもの、三々五々相集つて雑談に一夜を更かすもの等とりへてはあるが、中には窓を飛び出し、土塀を乗り越え、附近の蕎麦屋等に空腹を満たす様な反則者もあつた。僕の室は三年目よりは舎監室よりは最も遠い東南隅に移されたので、兎角是等反則者に利用されがちであつた。 (『恵迪寮史』)



## 窓辺に熊の皮

ハシモト ナオヤ  
**橋本 直也** (1883-1980?年)

岡山県真庭市出身

東北帝国大学農科大学卒業 (1901-1909年在学)

実業家、酪農経営者

北海道煉乳株式会社の専務取締役を経て、八雲町で酪農経営を行なつた。義父は練乳研究の権威 橋本左五郎教授。

札幌の冬は酷寒、普通の皮靴では、凍結して役にたたぬとの話に…靴問屋に舶来のゴム長を見付け、大枚八円で買って来た…学校へ入学間もなく寄宿舍の窓に熊の皮を干してあるのを見た。寄宿生は鹿の肉を食べたと聞くが熊の肉も食べたのであろう。何のための熊の皮をと先輩にたずねたら、あれは江刺家昂という生徒が敷いてねているものだと知らされてさすがは北海道だなと驚いた。当時の先生は物理数学は原(十太)、漢文は進(龍男)さん、共に点の辛いので有名、英語は高杉(栄次郎)、独乙語は洋行帰りの伊藤清蔵さんなどであり、不平不満が勃発して小ストライキとなり、森川君が剃髪丸坊主となりあやまったのが記憶に残る。 (『札幌同窓会誌』復刊号)



## 放牧牛がのそのそ

スエミツ シンゾウ  
末光 信三 (1885-1971年)

愛媛県西予市出身

東北帝国大学農科大学卒業 (1904-1910年在学)

東北帝国大学農科大学予科教授

留学後、北大予科で英語を教え、同志社に転じて予科教授や系列中学校・高等学校長を務めた。

私が札幌農学校に入学したのは、明治三十七年九月であった。日露戦争たけなわにして、旭川の師団が、満州に出征すると言う時で、上野から青森までの汽車は、軍隊輸送の上り列車待合せのため、ほとんど各駅で二、三十分停車…四国的一角から札幌まで来るには、一週間を要したのである。札幌に着いて、早速学校を訪ねたが、学校は北二条の旧校舎から北八条の新校舎に移っていた。当時北六条以北は町とは言え、一面に牧草が茂り、それにまぎってタンポポが咲き乱れて、実に美観を呈していた。その上そこいらに放牧されていた牛が、のそのそと歩いている有様など、郷里の段々畑式の光景とは、およそかけはなれたものであった。 (『札幌同窓会誌』復刊号)



## 昆虫を追って、どこまでも

シラキ トクイチ  
素木 得一 (1882-1970年)

北海道函館市出身 第23期生 (1900-1906年在学)

昆虫学専攻、予科助教授、農学博士

農学校離任後、台湾総督府農事試験場技師、同高等農林学校教授などを経て、台北帝国大学理農学部長を務めた。

採集に出かけると松村(松年)先生は非常に負けずぎらいで、僕より何でもよけいに採らなければ気に食わないだね。それで松村先生は大きなビーティング・ネットを持ってウンカ(カメムシ目ウンカ科)を採って歩いてしょう。何匹採ったと言っては得意になっていたものです。ある時、定山溪に行った時に、先生と魚釣りの競走をやったこともありましたが。…宮部(金吾)先生と岡本君らと植物と昆虫の採集旅行でマツカリヌプリ山(羊蹄山)に登ったが、満足にまだ道がなくて、笹を鎌で切り開いた道で、尖ってるでしょう。登るのにずい分苦勞しました。植物をやった琉球の宮城鉄夫君は、はだしてね、笹が足にささるのも平気で登ったものです。それはとても印象に残ってるんですよ。その当時、僕は採集も上手でなかったですよ。 (『思い出すまに』)



## 遠友夜学校の学び舎

イワナミ ロクロウ  
**岩波 六郎** (1875-1964?年)

札幌市手稲区出身 第19期生 (1892-1901年在学)

畜産学専攻、畜産技師、実業家

月寒種牛牧場長を務めた。その後、明治乳業株式会社  
常務取締役、顧問に就任した。

(遠友夜学校では) 当時一処の先生に、…木村徳藏、蠣崎知二郎、井口為二郎、森本厚吉博士、有島武郎等…一、二の先生を除いて何れも苦学生で、一日一時間受持ち、一カ月の報酬は三円であった。尤も当時札幌農学校の授業料は一カ年十五円、之れを二期に分納するのであったが、急納者として事務所前に掲示さるゝのは吾々常連であった。当時新渡戸先生が生徒監であったので、夜学校の報酬と引当てに先生に立替払をして貰った。夜学校は豊平河畔の河原にある普通の二階住宅で、階下の畳の二室が教室で、長い机に坐って勉強する寺子屋式のものであった。生徒は男女合せて三十名位で、職工や子もり子などが多く居った…先生も生徒も真面目に勉強した。

(『札幌遠友夜学校』)



## トルストイ中毒

カワシマ イチロウ  
**川嶋 一郎** (1880-1976年)

岩手県二戸市福岡出身 第23期生 (1900-1906年在学)

畜産学専攻、畜産技師・福岡町長

月寒種牛牧場を皮切りに農商務省技師を勤め、千葉県  
や郷里岩手県二戸郡福岡町の行政に関わった。

私はその頃、足助(素一)であったか、末光(績)であったか、いづれその仲間の者から徳富蘆花の『思い出の記』を借れて読んだ、面白いなあ、と思った、それから又民友社の十二文学の内の矢張り蘆花著の『トルストイ伝』を借れてよんで、こんどはスッカリ「トルストイ」に敬服して、今度はトルストイの著書を読み初めた、勿論その頃は、まだトルストイの著書の日本訳はない時であったから、東京の丸善書店から英訳書を取りよせて読んだ、短編物は簡単に読み終へられたが、『レヂュアレクション』(復活)などは毎日数枚へ読んで、何ヶ月かかゝって読了したろう、…『ウォー、エンド、ピース』(戦争と平和)なども(遠友)夜学校の報酬で買い求めたが、これはどうへ手をかけかねた…大部冊のものは日本訳でも読みかねる。(「徳草 後篇」)



## 洋書輪読講義

タドコロ テツタロウ  
田所 哲太郎 (1885-1980年)

秋田県能代市出身

東北帝国大学農科大学卒業 (1904-1910年在学)

生物化学専攻、教授、農学博士・理学博士

食品化学の研究を進め、北大離任後は北海道学芸大学 (現在の北海道教育大学)・帯広畜産大学の学長も務めた。

十八歳の私には、佐藤昌介先生のフィッシャー万国史と、新渡戸稲造著の英文「武士道」の、講義といっても輪講が佐藤先生の間像にもふれた教育であった。また植物病理学者の宮部(金吾)先生は独立教会の牧師でもあって、私どもにバイブルクラスをグループでもつことを教えられた。またラスキンの美学倫理の英文輪講のような教育には、先生の心の美に対するあこがれを通して人間像を学ぶことができた。また農芸化学の先生で栄養学に造詣深い大島(金太郎)先生のスイントンの英文学史の輪講のような教育には、文学者の心のもち方を通しての人間像の形成に大きい影響をあたえたことを偲ぶのである。  
(『札幌同窓会誌』復刊号)



## ザリガニと豪傑先生がいたころ

ナカジマ クロウ  
中島 九郎 (1886-1959年)

佐賀県神崎市出身

東北帝国大学農科大学卒業 (1904-1910年在学)

農業経済学専攻、教授、農学博士

農政学を研究した。『北海道帝国大学沿革史』、『佐藤昌介』を執筆するなど、北大史のパイオニアでもあった。

昔円山あたりの谷川にはザリガニがよくいたものだが、今は減ったことであろう。私どもの予科時代には八田(三郎)教授の動物学実験にはよくザリガニを材料にしたものだ。八田は昔学習院から札幌農学校に來任したのだが、東京時代にはあの下田歌子(華族女学校学監、実践女学校創設者)らと共に羽振りをかかせた。今どきあまり見あたらない豪快な学者であった。或時私は級を代表し、八田先生に講義の時間を一時間だけ貫いにおそろおそろ教授室にはいったところ“欲しければ幾時間でもやろう”と高ビシヤに出られ、ギャフンと参つてそのままスゴスゴ引退つたことがある。彼は当時日本有数の動物発生学の権威であった。(『札幌九十年 物的篇・人物篇』)



オウサカ シンゴ  
**逢坂 信悉** (1882-1981年)

新潟県新潟市出身

東北帝国大学農科大学卒業 (1900-1908  
年在学)

牧師、文筆家

入学以前から内村鑑三の感化を受け、在  
学中にもキリスト教や社会主義思想に強  
い関心を持って活動した。

## 校長の頭は…



(逢坂信悉受講ノート：  
佐藤昌介講義「農業経済学」)



スズキ ゲンゾウ  
**鈴木 限三** (1884-1968年)

愛知県名古屋市出身

東北帝国大学農科大学卒業 (1904-1910年在学)

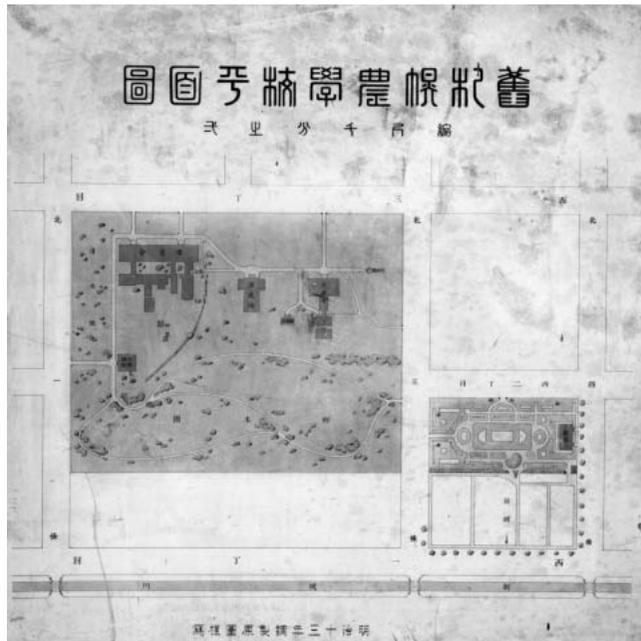
植物学専攻、北海道帝国大学予科教授

卒業後に東大でも植物学を学んだ。北大予科で植物学  
を担当、予科生に親しまれた名物教師となった。後に  
同志社へ転じた。

## 白亜の新校舎

新校舎は気持よく、ペンキの香、壁のにおい、新しく集まった友だちと共に、新しき  
気持の理想に燃えておりました。昆虫学教室、図書館、農芸化学教室、農学教室、動  
植物学教室、経済学教室など、真新しい白亜の壁で、牧草の茂った、にれの木の校庭  
の中に、青い光に包まれて、静まり返っておりました。まもなく、講義が始まりました。  
青葉 (萬六) 先生の物理の講義は、少し青い秀才型の顔に「パーセコンド、パー  
セコンド」というリズムの声音が、今も耳に残っております。…農学教室の二階から、  
西の方を見渡せば、農場と原始林のほかには、ほとんど人家もなく、北の方には第一  
農場の低い建物のほかは、アカシア街道の彼方に沼沢地の原始林が茂っていて、農事  
試験場が、その北にありました。  
(『白亜校舎の新しきころ』)

8. 風景パネル



P 1 旧札幌農学校平面図 (1880年)



P 2 札幌市街地 (1889年)



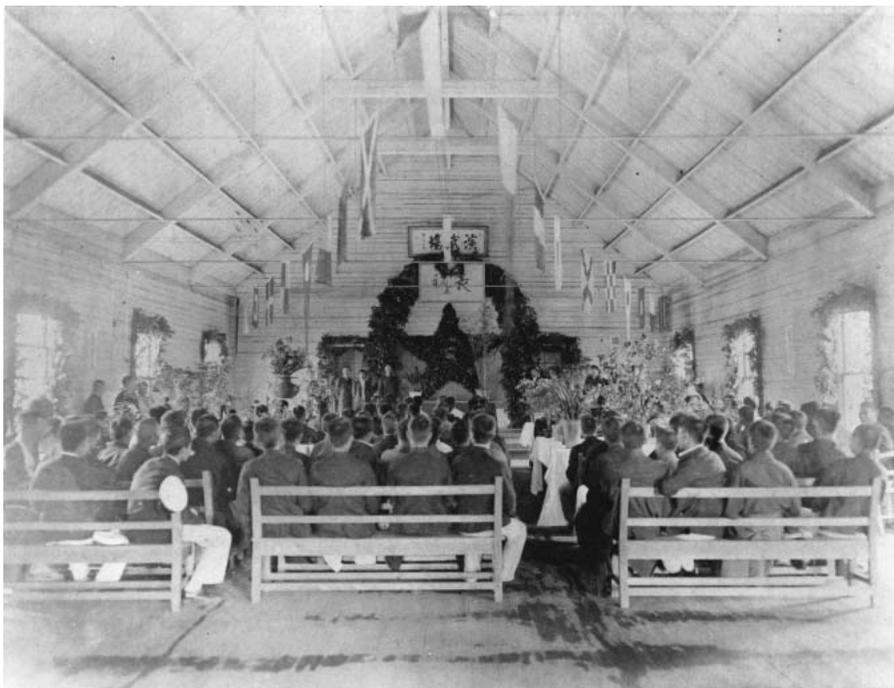
P 3 札幌農学校の農校園 (1880年頃)



P 4 北西から見た札幌農学校校舎 (1890年頃)



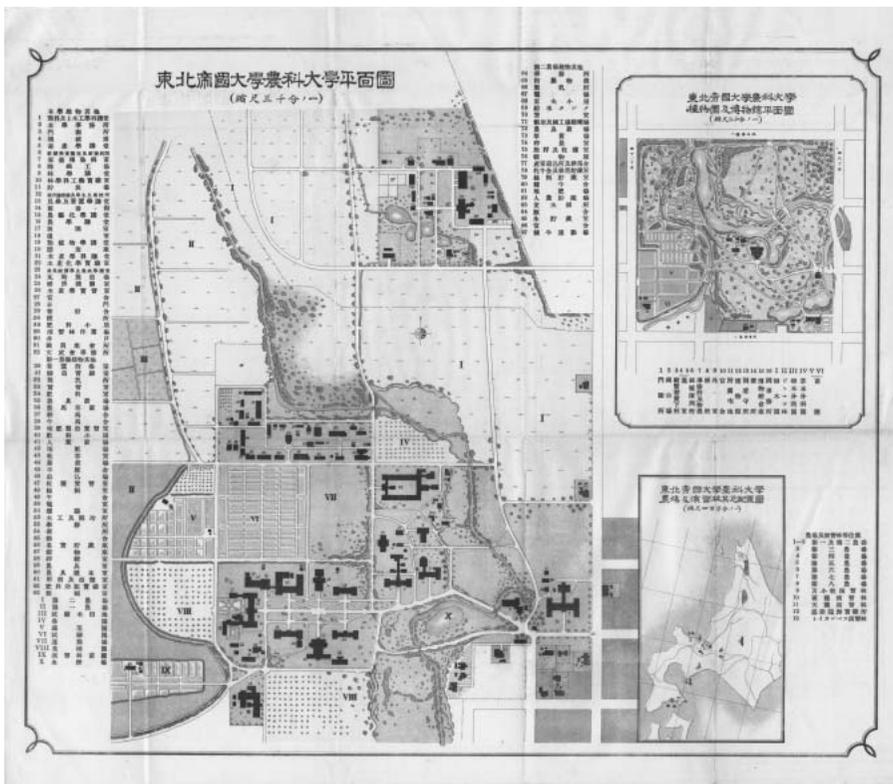
P 5 〈演武場外部〉演武場前の第20回遊戯会（1901年）



P 6 〈演武場内部〉佐藤昌介・宮部金吾・南鷹次郎の学位授与祝賀会（1899年）



P 7 〈図書館〉新築直後の札幌農学校図書館 (1903年12月)



P 8 〈新キャンパス〉校舎配置図 (1913年)